

去年

伊藤左千夫

青空文庫

君は僕を誤解している。たしかに君は僕の大部分を解していてくれない。こんどのお手紙も、その友情は身にしみてありがたく拝読した。君が僕に対する切実な友情を露ほども疑わないにもかかわらず、君が僕を解しておらぬのは事実だ。こういうからとて、僕は君に対しましてこんどのお手紙に対し、けっして不平などあつていうのではないのだ。君をわかりの悪い人と思うていうのではないのだ。

僕は考えた。

君と僕とは、境遇の差があまりにはなはだしいから、とうてい互いにあい解するということはできぬものらしい。君のごとき境遇にある人の目から見て、僕のごとき者の内面は観察も想像およぶはずのものであるまい。いかな明敏な人でも、君と僕だけ境遇が違つては、互いに心裏しんりをくまなくあい解するなどいうことはついに不可能事であろうと思うのである。

むろん僕の心をもつてしては、君の心裏がまたどうしてもわからぬのだ。君はいつかの手紙で、「わかるもわからぬもない。僕の心は明々白々で隠れたところはない」などというておつたが、僕のわからぬというのは、そういうことではない。余事はともかく、第一に君は二年も三年も妻子に離れておつて平氣なことであ

る。そういえば君は、「何が平気なもんか、万里異境ばんりにある旅情のさびしさは君にはわからぬ」などいうだろうけれど、僕から見ればよくよくやむを得ぬという事情があるでもなく、二年も三年も妻子を郷国に置いて海外に悠遊ゆうゆうし、旅情のさびしみなどはむしろ一種の興味としてもてあそんでいるのだ。それは何の苦もなくいわば余分の収入として得たるものとはいえ、万という金を惜しげもなく散じて、僕らでいうと妻子と十日の間もあい離れているのはひじょうな苦痛である独居のさびしみを、何の苦もないありさまに振舞ふるもうている。そういう君の心理が僕のところでどうしても考え得られないのだ。しからば君は天性冷淡な人かとみれば、またけっしてそうでないことを僕は知っている。君は先年長男子

を失うたときには、ほとんど狂きようせんばかりに悲嘆したことを僕は知っている。それにもかかわらず一度異境に旅寝しては意外に平気で遊んでゐる。さらばといって、君に熱烈なある野心があるともしえない。ときどきの消息に、帰国のちは山中に閑かん居するとか、朝鮮で農業をやろうとか、そういうところをみれば、君に妻子を忘れるほどのある熱心があるとはみえない。

こういうと君はまたきつと、「いやしくも男子たるものがそう妻子に恋々としていられるか」というだろう。そこだ、僕のわからぬというのは。境遇の差があまりにはなはだしいというのもそこだ。

僕の今を率直にいえば、妻子が生命の大部分だ。野心も功名も

むしろ心外いっさいの欲望も生命がどうかこうかあつてのうえと
いう固定的感念に支配されているのだ。僕の生命からしばらくな
りとも妻や子を剥はぎ取っておくならば、僕はもう物の役に立たな
いものになるに違いないと思われるのだ。そりやあまり平凡じゃ
と君はいうかもしれないねど、実際そうなのだからしかたがない。年
なお若い君が妻などに頓とんちやく着なく、五十に近い僕が妻に執着す
るというのはよほどおかしい話である。しかしここがお互いに解
しがたいことであるらしい。

貧乏人の子だくさんというようなことも、僕の今の心理状態と
似よった理由で解釈されるのかもしれない。そうかといつて、結
婚二十年の古夫婦が、いまさら恋愛でもないじゃないか。人間の

自然性だの性欲の満足だのとあまり流行臭い思想で浅薄^{せんぱく}に解し去つてはいけない。

世に親というものがなくなつたときに、われらを産んでわれらを育て、長年われらのために苦勞してくれた親も、ついに死ぬ時がきて死んだ。われらはいま多くのわが子を育てるのに苦勞してるが……と考えた時、世の中があまりありがたくな^ほく思われだした。いままで知らなかつたさびしさを深く脳裏に彫^ほりつけた。夫婦ふたりの手で七、八人の子どもをかかえ、僕^{さお}が棹^{さお}を取り妻が舵^{かじ}を取るという小さな舟で世渡りをするのだ。これで妻子が生命の大部分といった言葉^{ことば}の意味だけはわかるであろうが、かくのごとき境遇から起こつてくるときどきのできごととその事實は、君の

ような大船に安乗して、どこを風が吹くかというふうでいらるる人のけつして想像し得ることではないのだ。

こころ満ちたる者は親しみがたしといえ、少し悪い意味にとらるる恐れがあるけれど、そういう毒をふくんだ意味でなく公明な批判的の意味でみて、人生上ある程度以上に満足している人には、深く人に親しみ、しんから人を懐しがるということが、どうしてもわれわれよりは少ないように思われる。夫婦親子の関係も同じ理由で、そこに争われない差別があるであろう。とくに夫婦の関係などは最も顕著な相違がありはすまいか。夫婦の者が深くあいたよって互いに懐しく思う精神のほとんど無意識の間にも、いつも生き生きとして動いているということは、しよせい処世上つねに

不安に襲われつつある階級の人に多く見るべきことではあるまいか。

そりや境遇が違えば、したがって心持ちも違うのが当然じやと、
むぞうさ
 無造作に解決しておけばそれまでであるけれど、僕らはそれをい
 ま少し深く考えてみたいのだ。いちじるしき境遇の相違は、とう
 ていくまなくあい解することはできないにしても、なるべくは解
 し得るだけ多くあい解して、親友の關係を保つていきたい。

いつかのお手紙にもあつた、「君は近ごろ得意に小説を書いて
 るな、もう歌には飽きがきたのか」というような意味のことが書
 いてあつた。何ごともこのとおりだ、ちよつとしたことにもすぐ
 君と僕との相違は出てくる。

君が歌を作り文ぶんを作るのは、君自身でもいうとおり、作らねばならない必要があつて作るのではなく、いわば一種のものの好き一時の慰みであるのだ。君はもとより君の境遇からそれで結構けっこうである。いやしくも文芸にたずさわる以上、だれでもぜひ一所懸命になつてこれに全精神を傾倒けいとうせねばだめであるとはいわない。人生上から文芸を軽くみて、心の向きしだいに興を呼んで、一時の娯楽のため、製作をこころみるという、君のようなやり方をあえて非難するのではない。ただ自分がそうであるからとて、人もそうであると臆断おくだんするのがよくないと思う。

僕が歌を作り小説を書くのは、まったく動機が君と違うのだ。

僕はけつして道楽する考えで、歌や小説をやるのではない。自己

の生存上、どうしても歌と小説を作らねばならなく思うてやっているのだ。政治家にもなれず、事業家にもなれず、学者にもなれないとすれば、やや自分の天性に適した文芸にでも生きてゆく道を求めるのほかないではないか。それは娯楽も慰藉いしやもそれに伴うてすることはもちろんであるけれど、その娯楽といい慰藉というのも、君などが満足の上に満足を得て娯楽とし慰藉とするものとは、すこぶる趣おもむきを異にしているであろう。人からはどうみえるか知らないが、今の僕には、何によらず道楽するほど精神に余裕がないのだ。

数えくれば際限がない。境遇の差というものは実に恐ろしいものである。何から何までことごとくその心持ちが違っている。そ

れであるから、とうてい互いにじゅうぶんあい解することはできないのである。それにもかかわらずなお君に訴えようとするのは、とにかく僕の訴えをまじめに聞いてくれる者は、やはり君をおいてほかにありそうもないからだ。

二

去年は不景氣の聲が、ずいぶん騒がしかった。君などの耳には聞こえたかどうか、よし響いたにしたところで、松原越しに遠浦の波の音を聞くくらいに聞いたであろう。府下の同業者なども、これまで幾度かあった不景氣騒ぎには、さいわいにその荒波に触

るるの厄やくをまぬがれてきたのだが、去年という大厄年の猛烈な不景気には、もはやその荒い波を浴びない者はなかった。

売れがわるければ品物は残る。どの家にも物品が残つてゐるから、価値がさがる。こういうときに保存して置くことのできない品物、すなわち牛乳などはことに困難をする。何ほど安くても捨てるにはまじだ。そこでだれもだれも安くても売ろうとする。乳価はいよいよさがらねばならない。いっぽうには品物を残し（棄すたるの意）、いっぽうには価値がさがっている。収入は驚くほど減じてくる。動物を飼うてゐる営業であるから、収入は減じて、経費は減じない。その月の収入でその月の支払いがいつでも足りない。その足りない分はどうして補給するか。多少の貯蓄でもあればよい

が、平生がすでにあぶなく舟をこいでいる僕らであると、どうしても資本を食うよりほかはないことになる。これを俗に食い込みというのだが、君たちにはわからない言葉であろう。

君もおおよそは知つてるとおり、僕は營業の割合に家族が多い。畜牛の頭数とうすうに合あわして人間の頭数あたまかずが多い。人間にしても働く人間よりは遊食が多い。いわば舟が小さくて荷物が容積の分量を越えているのだ。事のあつたときのために平生余裕をつくる暇がないのだ。つねの時がすでに不安の状態にあるのだから、少し波風が荒いとなつては、その先どうなるのかほとんど見込みのつかないほど極度の不安を感じるのだ。

それが君、年のまだ若い夫婦ふたりの時代であるならば、よし

家を覆滅させたところで、再興のくふうに窮するようなことないから、不安の感じもそれほど深刻ではないが、夫婦ふたりの四ツの手に八人の子どもをかかえているという境遇であつてみると、その深刻な感じがさらにどれだけ深刻であるか。君たちにもたいていは想像がつくだろう。

七ツ八ツくらいまでは子どももほんの子どもだ。まだ親の苦勞などはわからなく、毎日曇りのない元気な顔に嬉々ききと遊戯にふけつてゐるが、それらの姉どもはもう親の不安を心得きつてゐる。親の心ではなるたけ子どもには苦勞もさせたくないから、できる限り知らさないようにしてはいるものの、不意にくる掛取りのいいわけを隠してすることもできないから、実は隠そうとしても

隠しきれない。親の顔色を見て、口にそうとは言わなくともさえない顔色して自然元気がない。子どもながら両親の顔色や話しぶりに、目を泣き耳を立てるといふふうであるのだ。

こうなると君、人間というやつはばかに臆病になるものだよ、何ごとにもおじ気がついて、埒らちもなくびくびくするのだ。

こんなことじやいかん、あまりひとすじに思い込むのは愚だ。不景気も要するに一時の現象だから一年も二年も続く気づかいはない。ともかく一ひとつき月一月でもどうにかやって行ければ、そのうち息をつくときもあるだろう。

だれでも考えそうな、たわいもない理屈を思い出して、一時の気安めになるのも、実は払わねばならぬものは払い、言い延のべの

できるものは言い延べてしまった、月と月との間ぎわ少しのあいだのことだ。収入はまた先月よりも減じた。支払いは引き残りがあからむろん先月よりも多い。一時のつけ元気で苦しさをまぎらかしたのも、姑息こそくの安を偷やすきぬすんでわずかに頭を休めたのも月末という事実問題でひとたまりもなく打ちこわされてしまう。

臆病心がいよいよこうじてくると、世の中のすべての物がごとく自分を迫害するもののように思われる。強風が吹いて屋根すみの隅でも損すみずれば、風が意地わるく自分を迫害するように感ずる。大雨が降る傘かさを買わねばならぬ。高げたを買わねばならぬといえ、もう雨が恐ろしいもののように思われる。同業者はもちろん仇敵きゅうてきだ。すべての商人はみな不親切に思われる。汽車の響き、

電車の音、それも何となく自分をおびやかすように聞こえるのだ。平生懇意こんいに交際しているあいだがらでも、向こうに迷惑をかけない限りの懇意で少しでも損をかけ、もしくは迷惑をさせたらば、その日から懇意な関係は絶えてしまう。けつきよく自分を離れないものは、世の中に妻と子とばかりである。

君はかならずいうだろう、「そりやあまりに極端な考えだ、誇張がありすぎる」と。そういつても実際の感じだから誇張でも何でもない。不自由をしたことのない人には不自由な味はわからぬ。獄にはいった人でなければ獄中の心持ちはわからない。

言い延べも限りがある。とどこおった払いはいつかは払わねばならぬ。何のくふうもなく食い込んでおれば家をこわして炊たくよ

うなものだ。たちまち風雨のしのぎがつかなくなることは知れきっている。

くふうといって別に変わったくふうのありようもないから、友人から金を借りようと決心したのだ。金に困って友人から金を借りたというだけならば、もとより問題にはならない。しかし食い込んでゆく補給に借りた金が容易に返せるはずのものでない。それは僕も知っておった。容易に返せないと知っておっても、借らねばならぬことになった。

そこであらたな苦しみをみずから求めることになった。何ほど親しい友人にでも、容易に返せないが金を貸せとはいえない。そういうば友人もおそらくは貸さない。つまるところはいつごろま

では返すからと友人をあざむくことになるのだ。友人をあざむく……道徳上の大罪を承知で犯す^{おか}ように余儀なくされた。友人の好意で一面の苦しみはやや軽くなつたけれど精神上に受けた深い疵傷^{きず}は長く自分を苦しめることになった。罪を知っているだけ苦痛は層一層苦痛だ。この苦痛からまぬがれたいばかりでも、借った金はいつときも早く返したい。寝る目のねざめにも、ああ返したいと心が叫んでいるのだ。

恐るべきものではないか、一度金を借りたとなると、友人はもはや今までの友人でなくなる。友人の関係と債主との関係と妙に混交して、以前のようなへだてなく無造作^{むぞうさ}な親しみはいつのまにか消えてゆく。こういう場合の苦痛はだれに話して聞かせようも

ない。

自分はどこまでも友人の好意に対し善意と礼儀とを失なわないうようにつとめる。考えてみると自分の良心をあざむいてまで、いわゆるつとめるといふことを実行する。けれども友人のほうはあるが、い平氣だ。自分からは三度も訪問しても友人は一度も来ないようなことが多い。こうなると友人という情義があるのかわからなくなってしまう。腹の底の奥深い所に、怨嗟えんさの情が動いておつても口にいふべき力のないはかない怨みだ。交際上の隠れた一種の悲劇である。友人のほうでは決して友人に金を貸すものではないと後悔しているのじやないかと思うてはいよいよたまらない。友人には搔かきちぎるほどそむきたくないが、友人はしだ

いに自分を離れる。罪がことごとく自分にあるのだから、懊惱おうのうのやるせがないのだ。

あぶない道を行く者は、じゅうぶんに足をふんばり背たけを伸ばして歩けないのが常だ。心をまげ精神を傷つけ一時を弥縫びほうした窮策は、ついに道德上の罪惡を犯すにいたった。偽りをもつて始まったことは、偽りをもつて続く。どこまでも公明に帰ることはできない。どう考えても自分はりっぱな道德上の罪人だ。人なかで高言のできない罪人だ。

君の目から見たらば、さだめて氣の毒にも見えよう、おかしくも見えよう。しかし君人間は肉体上に容易に死なれないごとく、精神上にもまた容易に死なれないものだ。

僕は今は甘んじて道德上の罪人となつたけれど、まだ精神上の悪人だとは自覚ができない。君、悪人が多く罪を犯すか、善人が多く罪を犯すか、悪人もとより罪を犯すに相違ないが善人もまた多く罪を犯すものだ。君は哲学者であるから、こういう問題は考へているだろう。

ある場合においては善人かえつて多く罪を犯すことがあるまいか。

善人の罪を犯さないのは、その善人なるがゆえでなく、決行の勇気を欠くためにしかるのではあるまいか。少しく我田引水に近いが僕の去年の境遇では、僕がどこまでも精神上的の清潔を保持するならば、僕の一家は離散するのほかはなかったし罪惡と知って

罪惡を犯した苦しさ悲しさは、いまさら繰り返す必要もない。一家十人の離散が救われたと思えば、僕は罪人たるに甘んじねばならぬ。君もこの罪はゆるしてくれるだろう。僕の友人としての関係はよし旧のごとくならずとするも僕の罪だけはゆるしてくれるだろう。

君、僕の懊悩はまだそればかりではない。僕の生活は内面的にも外面的にも、矛盾と矛盾で持ち切っているのだ。趣味の上からは高潔純正をよろこび、高い理想の文芸を味おうてる身で、生活上からは凡人も卑いやしとする陋ろうれつ劣な行動もせねばならぬ。八人の女の子はいつかは相当に婚嫁こんかさせねばならぬ。それぞれ一人前の女らしく婚嫁させることの容易ならぬはいうまでもない。この重

い重い責任を思うと五体もすくむような心持ちがする。しかるに
もかかわらず、持つて生まれた趣味性の嗜好^{しこう}は、君も知るごとく
僕にはどうしても無趣味な居住はできないのだ。恋する人は、理
の許す許さぬにかかわらず、物のあるなしにかかわらず恋をする。
理が許さぬから物がなからとて忍ぶことのできる恋ならば、そ
れは真の恋ではなからう。恋の悲しみもそこにある。恋の真味も
そこにある。僕の嗜好^{しこう}もそれと同じであるから苦しいのだ。嗜好
に熱があるだけ苦しみも深い。

友人の借錢もじゅうぶんに消却し得ず、八人の子のしまつも安
心されない間で、なおときどき無要なものの好きをするのがそれだ。
この徹頭徹尾^{てつとうてつび}矛盾した僕の行為が、常に僕を不斷の悔恨と懊

悩とに苦しめるのだ。もつとも僕の今の境遇はちやうど不治の病いにわずらっている人のごとくで、平生苦悩の絶ゆるときがないから、何か他にそれをまぎらわすべき興味的刺激がなければ生存にたえないという自然の要求もあるだろう。

矛盾混乱なにひとつ思うようにならず、つねに無限の懊悩に苦しみながらも、どうにか精神的の死滅をまぬかれて、なお奮闘ふんとうの勇を食い得るのは、強烈な嗜好が、他より何物にも犯されない心苑しんえんを闢ひらいて、いささかながら自己の天地がそこにあるからであるとみておいてもらいたい。

自分で自分のする悲劇を観察し批判し、われとわが人生の崎嶇きくを味わいみるのも、また一種の慰藉にならぬでもない。

それだけ負け惜しみが強ければ、まア当分死ぬ氣づかいもない
と思つておつてくれたまえ。元來人間は生きたい生きたいの悶^{もんそ}
躁^うでばかり動いている。そうしてどうかこうか生を寄するの地
をつくつてゐるものだ。ただ形骸^{けいがい}なお存しているのに、精神早
く死滅しているというようなことにはなりたくない。愚痴^{ぐち}はこれ
くらいでやめるが、僕の去年は、ただ貧乏に苦しめられたばかり
ではなかつた。

三

矛盾^{むじゆん}した二つのことが、平氣で並行されるといふことは、よ

ほど理屈にはずれた話だけれど、僕のところなどではそれがしじゅう事実として行なわれている。

ある朝であつた。妻は少し先に起きた。三つになるのがふとんの外へのし出て眠っているのを、引きもどして小枕を直しやりながら、

「ねいあなた、まだ起きないですか」

「ウム起きる、どうしたんだ」

見れば床にすわりこんで、浮かぬ顔をしていた妻は、子どもの寝顔に目をとめ、かすかに笑いながら、

「まアかわいい顔して寝てる、こうしているのを見ればちつとも憎くないけど……」

ちつとも憎くないけどの一語は僕の耳には烈しい目ざましになった。妻はふたたび浮かぬ顔に帰ってうつぶせになにものかを見ている僕は夜具をはねのけた。

「ねいあなた、わたしの体はまたへんですよ」
からだ

僕は、ウムと答える元気もなかった。妻もそれきり一語もなかった。ふたりとも起たつて夜具はずんずん片づけられる。あらたなるできごとをさとして、烈しく胸に響いた。話するのもいやな震動は、互いに話さなくとも互いにわかっている。心理状態も互いに顔色でもうわかつてる。妻は八人目を懐かいた胎したのだ。

「ほんとに困ったものねい」

と、というような言葉は、五人目ぐらいの時から番ごと繰り返さ

れぬいた言葉なのだ。それでもこの寝ているやつときまでは、

「もうかい……」

「はア……」

くらいな言葉と同時に、さびしいようなぬるいような笑いを夫婦が交換したものだ。

「えいわ、人間が子どもできないようになれば、おしまいじゃないか」

こんなつけ元気でとかくさびしさをまぎらわし得たものだ。

けさのふたりは愚痴をいう元気がないのだ。その事件に話に触れるのが苦痛なのだ。人が聞いたらばかばかしいきわみな話だろうが、現にある事実なのだ。しかも前夜僕は、来客との話の調子

で大いに子ども自慢をしておったのだから滑稽こっけいじゃないか。

子を育てないやつは社会のやつかい者だ。社会の恩知らずだ。

僕らのようにたくさんの子を育てる者に対して、国家が知らぬふうをしているという法はない。子どもを育てないやつが横おうちやく着しづくの仕得しどくをしてるといふ法もない。これはどうしても国家が育児に關する何らかの制度を設けて、この不公平を矯ためるのが当然だ。

第二の社会に自分の後継者を残すのは現社会の人の責任だ。だから子を育てないやつからは、少くもひとりについてひとりずつ、夫婦ふたりでふたりの後継者を作るべき責務として、国家は子のない者から、税金を取るべきだ。そうして余分に子を育てる人を保護するのが当然だ。僕は実に第二の社会に対しては大恩人だ。

妻の両親も健康で長命だ。僕の両親も健康で長命だった。夫婦ともにも不潔病などは親の代からおぼえがない。健全無垢な社会の後継者を八人も育てつつある僕らに対して、社会が何らの敬意も払わぬとは不都合だ。しかしまた、たとえ社会が僕らに対して何らの敬意を払わないにしても、事実において多くの社会後継者を養いつつあるのだから、ずいぶんいばつてもよいだろう……。

そんな調子に前夜は空気炎^{から}をはいておおいに来客をへこませ、すこぶる元氣よく寝についた僕も、けさは思いがけない「またへんですよ」の一言に血液のあたたかみにもわからに消えたような心地^{こち}になってしまった。例のごとく楊枝^{ようじ}を使って頭を洗うたのも夢心地であつた。

門前に立ってみると、北東風がうす寒く、すぐにも降つてきそうな空際だ。^{ぎわ}日清紡績の大煙突^{だいえんとつ}からは、いまさらのごとくみなぎり出した黒煙が、深川の空をおおうて一文字にたなびく。壯觀にはちがいないが不愉快な感じもする。

多く社会の後継者をつくるということは、最も高い理想には相違なきも、子多くして親のやせるのも生物の真理だ。僕はこんなことを考えながら、台所へもどつた。

親子九人でとりかこむ食卓は、ただ雑然として列も順序もない。だれの碗^{わん}だれの箸^{はし}という差別もない。大きい子は小さい子の世話を^{なべ}する。鍋に^{ひつ}近い櫃に近い者が、汁を盛り飯を盛る。自然で自由だともいえる。妻は左右のだれかれの世話をやきながらも、先刻

動揺した胸の波がまだ静まらない顔つきである。いつもほど食卓のにぎわわないのは、親たちがにぎやかさないからだ。

琴のおさらいが来月二日にある。師匠の師匠なる大家が七年目に一度するという大会であるから、家からも三人のうち二人だけはぜひ出てくれという師匠からの話があったから、どうしようかと梅子がいい出した。梅子は両親の心もたいていはわかつてるから、師匠がそういうたとばかり、ぜひ行きたいとはいわないのだ。しばらくはだれも何とも言わない。僕も妻もまた一種の思いを抱^{いだ}かずにはいられなかった。

父は羽織^{はおり}だけはどうかくふうしてふたり行つたらよかろうという。父は子どもたちの前にもいくぶんのみえ心がある。それば

かりでなく、いつとてこれという満足を与えたこともないのだから、この場合とてもそんなことがと心いながらも頭からいけないというのは、どうしてもいえないでそういつたのだ。

母なるものには、もとより心にはないことはいえない。そうかといつて、てんからいけないとはかわいそうで言えないから、口出しができないでいる。

「そんならわたいの羽織を着て行けばいいわ」と、長女がいいだした。梅子は、

「人の着物借りてまでも行きたかない。わたい」

「そんなら着物を持つて蒼生子たみこがひとり行くことにしておくか」
両親の胸を痛めたほど、子どもたちには不平がないらしく話は

段落がついた。あとはひとしきり有名な琴曲家の噂話うわさになった。僕は朝からの胸の不安をまぎらわしたいままに、つとめて子どもたちの話に興をつけて話した。けれども僕の気分も妻の顔色も晴れるまでにいたらなかった。

若衆は牛舎の仕事を終わって朝飯あさめしにはいつてくる。来る来る当歳の牝牛めが一頭ねたきり、どうしても起きないから見て下さいというのであった。僕はまた胸を針で刺されるような思いがした。二度あることは三度ある。どうも不思議だ、こればかりは不思議だ。僕はひとり言ごちながらさつそく牛舎に行つてみた。熱もあるようだ。臀部でんぶに戦慄ふるえを感じ、毛色がはなはだしく衰え、目が闇あんる涙いを帯おんでる。僕は一見して見込みがないと思った。

とにかくさつそく獣医に見せたけれど、獣医の診断も曖昧であつた。三日目にはいけなかつた。間の悪いことはかならず一度ではすまない。翌月牝子牛を一頭落とし、翌々月また牝牛を一頭落とした。不景気で相当に苦しめられてるところへこの打撃は、病身のからだに負傷したようなものであつた。

三頭目の斃牛^{へい}を化製所の人夫に渡してしまつてから、妻は不安にたえない面持ち^{おもも}で、

「こう間の悪いことばかり続くというのはどういふものでしょう。そういうとあなたはすぐ笑つてしまいますけど、家の方角^{ほうかく}でも悪いのじゃないでしょうか」

「そんなことがあるもんか、間のよい時と間の悪い時はどこの家

にもあることだ」

こういつて僕はさすがに方角を見てもらう気も起こらなかったが、こういう不運な年にはまたどんな良くないことがこようもしれぬという恐怖心はひそかに禁じ得なかった。

四

五月の末にだれひとり待つ者もないのにやすやすと赤子^{あかご}は生まれた。

「どうせ女でしょうよ」

妻はやけにそういえば、産婆は声静かに笑いながら、

「えいお嬢さまでいらつしやいますよ」

生まれる運をもつて生まれて来たのだ。七女であろうが八女であらうが、私にどうすることもできない。産婆はいちように産婆のなすべきことをして帰った。赤子はひとしきり遠慮えんりよえしやく会釈もなく泣いてから、仏のような顔して眠っている。姉々にすぐれて顔立ちが良い。

「大事にされる所へ生まれて来やがればよいのに」

妻はそういう下から、手を伸べて顔へかかった赤子の着物をな
おしてやる。このやつかい者めがという父の言葉には、もう親の
いとしみをこめた情がひびいた。口々に邪慳じゃけんに言われても、手
ですることには何の疎略そりやくはなかった。

「今に見ろ、このやつかい者に親も姉きょうだい妹も使い回されるのだ」
「それだから、なおやつかい者でさあね」

毎日洗われるたびに、きれいな子だきれいな子だといわれてる。
やつかいに思われるのも日一日と消えて行く。

電光石火……そういう間にも魔の神にのろわれておったものか、
八女の出産届をした日に三ツになる七女は池へ落ちて死んだ。こ
のことは当時お知らせしたことで、僕も書くにたえないから書か
ない。僕ら夫妻は自分らの命を忘れて、かりそめにもわが子をや
っかいに思ふたことを深く悔い泣いた。

多いが上にまた子どもができるといつては、吐息といきを突いて嘆息
したものが、今は子どもに死なれて、生命もそこなうばかりに泣

いた。

むじゅんどうちやく

矛盾撞着……信仰のない生活は、いかりを持たない船にひとしく、永遠に安住のないことを深刻に恥じた。

五

七月となり、八月となり、牛乳の時期に向かつて、不景気の荒波もようやく勢いを減じたが、幼女を失うた一家の痛みは、容易に癒ゆる時はこない。夫妻は精神疲労して物に驚きやすく、夜寝てもしばしば眼をさますのである。

おりから短夜の暁いまだ薄暗いのに、表の戸を急がしく打ちた

たく者がある。近所にいる兄の妻が産後の急変で危篤であるから、すぐに某博士を頼んでくれとのことを語るのであった。

驚いている間もない。妻を支払いの者とともに駆けつけさせ、自分たちはただちに博士を依頼すべく飛び出して家を出でて二、三丁、もう町は明け渡っている。往来の人も少なくはない。どうしても俵が得られなく、自分は重い体を汗みじくに急いだ。電車道まで来てもまだ電車もない。往来の人はいずれも足早に右往左往している。

人が自分を見たらば何と見るか、まだ戸を明けずにいる人もあるのに、いま時分急いで歩く人は、それぞれ人生の要件に走っているのであらう。自分が人を見るように、人も自分を見て、何の

要事で急ぐのかと思うのだろう。自分がいま人間ひとりの生死を気づかいつつ道を急ぐように、人もおのおの自己の重要な事件で走っているであろう。

あるいは自分などより層一層痛切な思いを抱いて、足も地につかない人もあろう。あるいは意外の幸運に心も躍って道の遠いのも知らずにゆく人もあろう。事の余儀なきにしぶしぶ出てきて足の重い人もあろう。

自分は考えるともなしこんなことを考えながら、心のすきすきあによめに嫂の頼み少ない感じが動いてならなかった、博士は駿河台の某病院長である。自分は博士の快諾かいだくを得てすぐ引つ返したけれど、人力もなく電車もないのに気ばかりせわしくて五体は重い。

まゆげ
眉毛もぬれるほどに汗をかいて急いでも、容易に道ははかどらない。

細りゆく命をささえて、病人がさぞかし待ち遠であろうと思うと、眼もくらむばかりに苦しくなる。病人の門を望見したときに、博士は二人引きの腕車で後からきた。自分はともに走って兄の家に飛び込んだ。けれども門にはいつてあまりに家のひっそりしているを気づかった。果たして間に合わなかった。三十分ばかり前に息を引きとったとのことであつた。博士は産後の出血は最も危険なこと、手当てに一刻の猶予もできないことなどを語って歸つた。寄つた人の限りはあい見て嘆息するほかはなかつた。

嫂は四十二であつた。きのうの日暮れまでも立ち働いておつた

そうである。夜の一時ごろにしかも軽く分娩ぶんべんして、赤子あかごは普通より達者である。

自分は変わった人のさまを見るに忍びなかったけれど、あまり運命の痛ましに、会わずにいるにもたえられない。惨として死のにおいが満ちた室にはいつて、すでに幽明隔たりある人に会った。胸部のあたりには、生せいの名残りなごの温気がまだ消えないらしい。

平生赤みかかった艶つやのよい人であつたが、全血液を失うてしもうたものか、蒼黄色に変じた顔は、ほとんどその人のようでなかった。嫂はもうとてもむつかしいと見えたとき、

「わたしもこれで死んでしまつてはつまらない……」

と、いったそうである。若くして死ぬ人の心は多くその一語に

帰すのであろう。平凡な言葉にかえって無限の恨み^{うら}がこもっている。きのうの日暮れまで働いていた人が、その夜の明け明けにもはや命が消える。多くの子どもや長年添うた夫を明るい世にのこし、両親が会いにくるにも間に合わないで永久の暗に沈まんとする、最後を嘆く暇^{いとま}もない。

「これで死んでしまつてはつまらない」

もがく力も乏しい最後の哀音^{あいおん}、聞いたほどの人の耳には生涯消えまじくしみとおつた。自分は妻とともにひとまず家に帰つて、ただわけもわからずため息をはくのであつた。思わず妻の顔子どもたちの顔を見まわした。まさか不意にだれかが死ぬというようなことがありやせまいなと思われたのである。

その赤子がまもなくいけなかった。ついで甥おいの娘が死んだ、友人の某が死に某が死んだ。ついに去年下半年の間に七度葬式に列した僕はつくづく人生問題は死の問題だと考えた。生活の問題も死の問題だ。営業も不景気も死の問題だ。文芸もまた死の問題だ。そんなことを明け暮れ考えておった。そうして去年は暮れた。

不幸ということがそう際限もなく続くものでもあるまい。年の暮れとともに段落になつてくれればよいがと思っていると、息はく間もなく、かねて病んでおった田舎いなかの姉が、新年そうそうに上京した。それでこれもまもなく某病院で死んだ。姉は六十三、むつかしい病氣であつたから、とうから覚悟はしておった。

「欲にはいま三年ばかり生きられれば、都合がえいと思つてたが、

あに今死んだつておれは残り惜しいことはない……」

こう自分ではいったけれど、知覚精神を失った最後の数時間までも、薬餌やくじをしたしんだ。匙さじであてがう薬液を、よく唇くちびるに受けてじゅうぶんに引くのであつた。人間は息のとまるまでは、生きようとすゝる欲求は消えないものらしい。

六

いささか長いに閉口するだろうが、いま一節を君に告げたい。

この春東京へは突如として牛疫が起こつた。いきおい猛烈にわが同業者を蹂躪じゅうりんしまわつた。二カ月の間に千二百頭を撲殺した

のである。僕の周囲にはさいわいに近くになから心配も少ないが、毎日二、三枚ずつはかならずはがきの報告がくる。昨夜某の二十頭、けさ某の四十頭を撲殺云々うんぬんと通じてくるのである。某の七十頭、某の九十頭など、その惨状は目に見えるようである。府内はいつさいそうていじゅう双蹄獣しやだんの出入往来を厳禁し、家々においてもできる限り世間との交通を遮断しやだんしている。動物界に戒厳令が行なわれているといつてよい。僕はさいわいに危険な位置をいささか離れているけれど、大敵に包囲されている心地である。もつとも他人の火事を見物するような心持ちではいられないのはもちろんだ。

同業者間にはかねての契約がなり立っている。同業中不幸にし

牛疫にかかった者のあつた場合には何人なんびともその撲殺評価人たる依頼を拒まれぬということである。それで僕はついに評価人にならねばならぬ不幸が起こった。

深川警察署からの通知で、僕は千駄木町の知人某氏の牛疫撲殺に評価人として出張することとなった。僕ははじめて牛疫を見るという無経験者であるから、すこぶる気持ちは良くないがやむを得ないのだ。それに僕が評価人たることは、知人某氏のためにも利益になるのであるから、勇を鼓して出かけて行つた。

日の暮れ暮れに某氏の門前に臨のぞんでみると、警察官が門において人の出入を誰何すいかしている。門前には四十台ばかりの荷車に、それに相当する人夫がわやわや騒いでおつた。刺しを通じて家にはい

ると、三人警部と茶を飲んでおった主人は、目ざとく自分を認めた。僕がいうくやみの言葉などは耳にもはいらず。

「やアとんだご迷惑で……とうとうやつちやつたよアハハハハ」

と事もなげに笑うのであつたが、茶碗ちやわんを持った手は震えてお

つた。女子どもはどうしたか見えない。巡查十四、五人、屠殺人、消毒の人夫、かれこれ四十人ばかりの人たちが、すこぶるものなれた調子に、撲殺の準備中であつた。牛の運動場には、石灰をおびただしくまいて、ほとんど雪夜のさまだ。

僕は主人の案内でひととおり牛の下見したみをする。むろん巡查がひ

とりついてくる。牛疫の牛というのは黒毛の牝牛赤白斑まだらの乳牛である。見ると少しく沈鬱ちんうつしたようすはしているが、これが恐る

べき牛疫とは素人目しろうとめには教えられなければわからぬくらいである。その余の三十余頭、少しも平生に変わらず、おのおの争うて餌をすすっている。

「こうしているのをいま少しすぎにみな撲殺してしまうのかと思うと、損得に関係なく涙が出る」

主人はいまさら胸のつかえたように打ち語るのであった。けさ分娩したのだという白牛は、白黒斑のきれいなわが子を、頭から背から口のあたりまで、しきりにねぶりまわしているなどは、いかにも哀れに思われた。牝牛のうめき声、子牛の鳴き声等あい混こんじてにぎやかである。いずれもいずれも最後の飼葉かいばとしていま当てがわれた飼桶かいおけをざらざらさも忙しそうに音をさせてねぶつて

いる。主人は雇^{やといにん}人に、

「これきりの飼葉だ、ねぶらせておけよ。桶も焼いてしまうのだ。かじつてえい……」

主人の声はのどにつまるように聞こえた。僕は慰めようもなく、ただおおいに放^{ほう}胆^{たん}なことをいうて主人を励ました。

警視庁の獣医も来て評価人も規定どおり三人そろうたから、さつそくということとで評価にかかった。一時四十分ばかりで評価がすむとまったく夜になった。警官連はひとりに一^{ひと}張^{はり}ずつことごとく提^{ちよう}灯^{ちん}を持って立った。消毒の人夫は、飼料の残品から、その他牛舎にある器物のいっさいを運び出し、三カ所に分かつて火をかけた。盛んに石油をそそいでかき立てる。一面にはその明

りで屠殺にかかろうというのである。

牧夫は酒を飲んだ勢いでなければ、とても手伝つてられないという。主人はやむを得ず酒はもちろん幾分の骨折りもやるということで、ようやく牧夫を得心さした。警官は夜がふけるから早く始めろとどなる。屠手は屠獸所から雇うてきたのである。撲殺には何の用意もいらない。屠手が小さな斧おのに似た鉄鎚てつづいをかまえて立っているところへ、牧夫が牛を引いて行くのである。

最初に引き出したのは赤毛の肥ふとった牝牛めうしであつた。相当の位置までくると、シャツにチョッキ姿の屠手は、きわめて熟練したもので、どすと音がしたかと思うと、牝牛は荒れるようすもなく、わずかに頭を振るかとみるまに両りようひざ膝を折つて体をかがめると

ひとしく横にころがつてしまう。消毒の係りはただちに疵きず口ぐちをふさぎ、そのほか口鼻肛門こうもん等いっさい体液の漏泄ろうせつを防ぐ手数てすうをとる。三人の牧夫はつぎつぎ引き出して適當の位置にすえる。三十分をいわずして十五、六頭をたおしてしまった。同胞姉妹が屍しかばねを並べてたおされているのも知らずに、牛はのそのそ引き出されてくる。子持ちの牛はその子を振り返り見てしきりに鳴くのである。屠手はうるさいともいわず、その牛を先にやってしまった。鳴きかけた声を半分にして母牛はおれてしまう。最も手こずったのは大きな牡牛おうしであつた。牧夫ふたりがようやく引き出してきても、いくらかあたりの光景に氣が立つたとみえ、どうかすると荒れ出そうとして牧夫を引きずりまわすのであつた。屠手は進んで

自分から相当の位置を作りつつ、すばやく一撃を加えた。今まで荒れそうにしていた大きい牡牛も、土手を倒したようにころがってしまった。警官や人夫やしばしば実行して来た人たちと見えて、牛を殺すなどは何とも思わぬらしい。あえて見るふうもなくむだ話をしている。

僕はむしろ惨状見るにたえないから、とうに出てしまおうとしたのだけれど、主人の顔に対して暇を告げるのが気の毒でたまらず、躊躇ちゆうちよしながら全部の撲殺を見てしまった。評価には一時四十分間かかったが、屠殺は一時二十分間で終わってしまった。無愛想な屠手は手数料を受け取るや、話一つせずさっさと帰って行った。警官らはこれからが仕事だといって騒いでいる。牛はこ

とごとく完全に消毒的手配をして火葬場へ運ぶのである。牛舎はむろん大々の消毒をせねばならぬ。

いままで雑然騒然、動物の温気に満ちていた牛舎が、たちまちしんとして寂莫たるように変じたのを見て、僕は自分もそれに引き入れられるような気分がして、もはや一時もここにいるにたえられなくなった。

僕は用意してきたあらたな衣服を着がえ、牛舎にはいった時着た衣服は、区役所の消毒係りの人にたくしてここを出た。むろんすぐに家へは帰られないから、一週間ばかり体を清めるためその夜のうちに国府津^{こうづ}まで行つた。宿についても飲むも食うも気が進まず、新聞を見また用意の本など出してみても、異様に神経が興

奮っていて、氣を移すことはできなかった。見てきた牛の形が種々に頭に映じてきてどうにもしかたがない。無理に酒を一口飲んだまま寝ることにした。

七日と書いてもとても七日はいられず三日で家に帰った。人の家のできごとが、ほとんどよそごとでないように心を刺激する。僕はよほど精神が疲れてるらしい。

静かに過ぎてきたことを考えると、君もいうようにもとの農業に返りたい氣がしてならぬ。君が朝鮮へ行つて農業をやりたいというのは、どういう意味がよくわからないが、僕はただしばらくでも精神の安静が得たく、帰農の念がときどき起るのである。しかし帰農したらば安静を得られようと思うのが、あるいは一時

の懊惱おうのうから起こるでき心かもしれない。

とにかく去年から今年へかけての、種々の遭遇によつて、僕は
 おおいに自分の修業未熟ということを中心かぜられた。これによ
 つて君が僕をいままでわからずにおつた幾部分かを解してくれれ
 ば満足である。

青空文庫情報

底本：「野菊の墓他六篇」新学社文庫、新学社

1968（昭和43）年6月15日発行

1982（昭和57）年6月1日重版

入力：大野晋

校正：小林繁雄

2006年7月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

去年

伊藤左千夫

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>